

# 「さけ・ます」のアイヌ名と それにちなむ地名について



森 宏太郎  
(前・北海道開発局次長)

「さけ・ます(鮭・鱈)」が今日でも北海道を代表する魚であることに変わりはないが、むかしは、アイヌ人たちにとって「魚」といえば、まず、「さけ・ます」であり、「さけ・ます」はもっとも大切な食物であった。

そのことは、アイヌ人たちが「さけ」のことを「チュエ(chep)」と呼んでいたことからもうかがわれる。「チュエ」を分解すれば「チ(われわれ) + 「エ(食べる) + 「プ(もの)だから、「チュエ」とは(われわれの食物)ということになる。このことばは「さけ」が、アイヌ人たちにとって、「主食」であったことをあらわしているといえよう。

この「チュエ」というアイヌ語に関係があることばとして「ちゃぶ台(食卓)や「ちゃぶ屋」などの「ちゃぶ」がある。この語源不明のことばも、アイヌ語の「チュエ」から来たと考えれば理解できるのである。

さて、アイヌ語の「チュエ」は、(鮭)の意味のほか、(魚)全体をも意味した。

たとえば、北海道では、支笏湖などでとれる「ひめます(陸封性の「べにさけ)」のことを、普通「チップ」とよんでいるが、これは、アイヌ語の「カバチュエ(薄い魚)の前半を省略し、語尾の「チュエ」を「チップ」となまったものなのである。(なお、「チップ」では、アイヌ語で、「舟」になってしまう。)

ところで、「さけ・ます」がアイヌ人にとって重要な食物であったところから、北海道には、「さけ・ます」の名にちなむ地名が多い。

そのいくつかを紹介しよう。

まず、「さけ」の名から。

アイヌ人たちは、「さけ」のことをただ単に

「チュエ」とよんだほか、「カムイチエプ(Kamuichep)」ともよんだ。

「カムイ」は(神)のことだから、「カムイチエプ」とは、(神魚)ということであり、「さけ」を「神の化身」と見たのである。

さらに、「さけ」は、秋に獲れるところから、「チュキペ(chukipe)」ともいった。このことばは、「チュクイペ」がつまったもので、「チュク」とは(秋)のことであり、「イペ」は「チエプ」の「エプ」と同じく(食物)ということである。

なお、アイヌ語で(鮭)を意味することばに「アキアンチ(aki-anchi)」ということばもあるが、これは、和語の「あきあじ(秋味)」を取り入れたものである。

さて、いま述べた「さけ」の名にちなむ地名をいくつか紹介しよう。

まず、「チュエ」にちなむ地名としては、「智恵文(ちえぶん)」(名寄市内の地名)があり、この地名はそこにある「智恵文沼(とう)」やそこを流れている「智恵文川」の名に由来している。

そして、「ちえぶん」とは、「チエプ・ウン」から来ており、「ウン」は(沢山入る)という意味の動詞だから、「智恵文沼」や「智恵文川」とは、鮭が多く遡ったのでこのような名がついたのであろう。

次に、「カムイチエプ」ということばがついた地名として、忠別川の一支流の旧名「カムイチエプオツナイ」があった。「オツ」は「ウン」と同じように(沢山入ってくる)という動詞だから、この支流の名は(鮭が沢山入ってくる川)という意味であった。

次に、「チユキペ」にちなむ地名としては、「築別（ちくべつ）川」や「直別（ちよくべつ）川」がある。（前者は羽幌町を、後者は十勝と釧路の境を流れている川である。なお、これらの川の名のいわれについては異説もある。）

また、「忠別（ちゅうべつ）川」も、「チユキペ」から来ていると見る説もある。

さて、次に、「ます（鱒）」の方に移ろう。

「鱒」は、アイヌ語で「サキペ」(Sakipe) とか「イチャニュー」(ichaniew) とかいった。

まず、「サキペ」だが、これは、「サク・イペ」から来ており、「サク」とは（夏）のことだから、「サキペ」とは（夏の食物）の意味である。

このことばは（鮭）の「チユキペ」に対応することばで、（鱒）の方は秋に川を遡ってくる（鮭）よりも早く、夏に川を遡ってくるところからこのように名づけられたものであろう。

一方、「イチャニュー」の方は「イチャン・イユウ」から来ており、「イチャン」とは（鮭・鱒の産卵穴）を指すことばで、「イユウ」は（……する人）を意味するから、「イチャニュー」とは（産卵穴を掘る人）ということになり「鱒」を擬人化した表現である。

次に、アイヌ語の「鱒」の名にちなむ地名をいくつか紹介しよう。

まず、「サキペ」にちなむ地名としては、道東の「崎無異（さきむい）川」がある。

この川の名は、「サキペ・モイ」から来ており、「モイ」は（入江）のことだから、この川の名は、（鱒が遡上する入江のある川）ほどの意味である。

「崎無異川」には、現在、水産庁のさけ・ますふ化場の捕獲場があるが、この川の名のいわれを知るとふさわしい場所といえよう。

次に、「イチャン」だが、このことばどおりの地名が、深川市の「一己（いっちゃん）」など各地にある。

また、道東の「伊茶仁（いちゃに）川」や「勇仁（いちゃに）川」の名も、「イチャン・

ウン・ナイ」から来ており、「ナイ」は（川）のことだから、（産卵穴が沢山ある川）という意味である。

「伊茶仁川」には、水産庁のさけ・ますふ化場の事業場があるが、その名はこの川が鮭・鱒が多く遡上する川であることを物語っている。

さらに、道央の「漁（いざり）川」の名も「イチャン」に「漁（いざり）」という漢字をあてたもので、この川の支流には、「モイチャン川」、「イチャンコッペ川」などがある。「モ」は、（小さい、支流の）という意味であり、「コッペ」は、（もつもの）という意味である。

次に、「さけ科」に属する魚の「あめます」と「いとう」の名とこれにゆかりのある地名を紹介しよう。

「さけ科」の「いわな属」の「あめます」は、アイヌ語で「トクシュシ (Tukushish)」といい、これにちなむ地名として「徳志別（とくしべつ）川」や「徳舜瞥」がある。

「徳志別川」は、「トクシュシ・ベツ（あめますがいる川）」から来ており、この川がある枝幸町徳志別には、水産庁のさけ・ますふ化場の事業場がある。

また、胆振の大滝村を流れている「徳舜瞥川」の名は、「トクシュシ・ウン・ベツ、（あめますが沢山ある川）」から来ている。

一方、さけ科の「いとう属」の「いとう」は、北海道独特の魚だが、最近では非常に減っており、「幻の魚」ともいわれている。この魚は、アイヌ語で「チライ (chirai)」といい、その名は各地の地名に残っている。国鉄の駅名にも「知来」(湧網線) や「知来乙」(札沼線) があるが、これらは、いずれも、その近くを流れている「チライオツ川（「いとう」が沢山ある川）」から来ている。

次に、アイヌ人たちの「さけ・ます」漁具に関することばとこれにちなむ地名を紹介しよう。

アイヌ人が「さけ・ます」を獲った漁法は、

いろいろあったが、このうち、最も進んだ漁法が「網」(アイヌ語で「ヤ(ya)といった)を使った漁法と「とめ」(アイヌ語で「テシ(Tesh)」といった)及び「やな」(アイヌ語で「ウライ(urai)」といった)を使った漁法であった。これらは、いずれも、河川の特定の場所に固定して設置したので、これらにちなむ地名が生まれているのである。

まず、「網」漁法は和人から導入したものと思われるが、「いらくさ」(アイヌ語で「モセ(mose)」で作った「ヤ」(網)を用いた漁法であり、これにちなむ地名として「矢白別(やすすべつ)」がある。この地名は(ヤ・ウス・ベ)から来ており、(網が沢山仕掛けられた川)の意味である。

根室の「矢白別川」には、現にさけ・ますの捕獲場がある。

次に「とめ」(テシ)は、狭い川幅のところ木で作った魚止めの柵のことで、これにちなむ地名として「天塩川」の名がある。すなわち、「天塩」とは、「テシ・オ」(「とめ」が沢山ある)から来ている。

従って、水産庁のさけ・ますふ化場の天塩支場の名もほんらい「さけ・ます」と関係があるわけである。

一方、「やな」(ウライ)に関する地名として

は、「浦白(うらうす)」、「浦士別(うらしべつ)」などがある。「浦白」は、「ウライ・ウス」、「浦士別」は「ウライ・ウシ・ベツ」から来ており、いずれも(「やな」が沢山ある(川))の意味である。

なお、「浦士別」と同じような地名の「浦子内(うらしない)」という地名が東北の秋田や岩手にもある。

ところで、アイヌ人たちは、「さけ・ます」などの「えもの(獲物)」を「ヌ(nu)」といった。このことばに関係のある地名には、「西別」や「虹別」がある。

「西別」や「虹別」は「ヌ・ウシ・ベツ」(えものの沢山いる川)から来ており、「西別川」がむかしから、さけ・ますが沢山とれた川であったことを物語っている。

現在も、「西別」には捕獲採卵場があり、「虹別」にはふ化場がある。

#### (付記)

本稿を作成するに当たって、故知里真志保氏著「アイヌの鮭漁」、更科源蔵氏著「アイヌ語地名解」および山田秀三氏著「北海道川の名」を参考にしたことを付記する。

